「少しずつ」構文と進展の意味
—「動作の進展」と「変化の進展」—

宮　城　　信

キーワード：「少しずつ」、進展の意味、動作の限界性、動作の継起性

要　旨

本稿の考察の目的は、進展を表す「少しずつ」構文が、どのような意味の進展を表しているのか。また、どのような要件が必要となるのか。その理由は何故なのかを明らかにする事である。まず、「少しずつ」構文における「少しずつ」の表す進展の解釈を記述し、その違いが「(動作の) 限界性」によってもたらされることを述べる。次に、「主体の入れ替え」の有無や「継起性」の含意に注目して、「少しずつ」構文の解釈との対応関係を整理する。このような分析を経て、「少しずつ」構文のそれぞれの解釈になぜそのような要件が要求されるのかを考察し、「少しずつ」構文の体系的な整理を試みる。

0. はじめに

副詞的修飾成分「少しずつ」には、次のように多様な進展を表す構文がある。仮にそれぞれの構文が表す進展を進展解釈 A ～ D とする。

(1) 太郎がドアを少しずつ開ける。　・・・〈進展解釈 A〉
　(「開く」という動作の量が「少しずつ」である)
(2) 太郎が牛肉を少しずつ買ってくる。　・・・〈進展解釈 B〉
　(何回か買ってくる牛肉の量が「少しずつ」である)
(3) 太郎が牛肉と豚肉を少しずつ買ってくる。(矢澤 1986 改)　・・・〈進展解釈 C〉
　(それぞれ買ってくる肉の量が「少しずつ」である)
(4) 太郎がカステラを少しずつ厚く切る[1]。　・・・〈進展解釈 D〉
　(カステラを切る厚さの変化が「少しずつ」である)

副詞的成分「少しずつ」についての記述だけでは、A ～ D の多様な進展解釈を包括的に記述することは困難であり、構文レベルでの分析が必要であると考えられる[2) 3)]。先行研究で取り上げられているのは、おもに(1)、(2)のような「少しずつ」構文についてで

ある。(3)に関しては、矢澤1986に指摘があるが、(4)に関してはほとんど指摘がない。これらの構文が同一のものとして扱えないことは、動作の継起性の含意や、達成量を表す成分の共起制限について、次のような違いがあることから明白であろう。

(5) 継起性の含意についての「同時に」共起テスト

a．*太郎がそのドアを　同時に　少しずつ開ける。　〈進展解釈A〉

b．*太郎が牛肉を　同時に　少しずつ買ってくる。　〈進展解釈B〉

c．　太郎が牛肉と豚肉を　同時に　少しずつ買ってくる。　〈進展解釈C〉

d．*太郎がカステラを　同時に　少しずつ厚く切る。　〈進展解釈D〉

(6)「達成量」を表す成分との共起テスト

a．　太郎がドアを少しずつ20cm開ける。　〈進展解釈A〉

b．　太郎が牛肉を少しずつ1kg買ってくる。　〈進展解釈B〉

c．?太郎が牛肉と豚肉を少しずつ1kg買ってくる[4]。　〈進展解釈C〉

d．?太郎がカステラを少しずつ厚く30cm切る。　〈進展解釈D〉

本稿では、それぞれの進展解釈における制限の違いが、「少しずつ」の解釈と修飾する進展の側面の違いや構文の要件の違いに起因すると考える。以下、いくつかのテストによって、「少しずつ」構文の体系的な位置づけを試みる。

1. 先行研究における「少しずつ」の記述と検討

1.1　矢澤1986、矢澤2000による記述とその検討

矢澤1986に「少しずつ」[5]について次のような指摘がある。

(7) その配分する量が動作・作用の進展と関わりない同時量の場合、「三人ずつ座っている」のように「結果残存」を表す場合があり〈中略〉達成量の場合、基本的には、successionの連続化を表すと考えられる。しかし、先行する名詞が一つの個体とみなされる場合、それに対する増減が数量で示されるときはrepetitionの連続化、数量では示しにくいときは過程化となりやすいのであろう。　(矢澤1986：85f. 下線は引用者注)

矢澤1986、矢澤2000をまとめると以下の四つに分類できる。

(8)【「少しずつ」が達成量を表す場合】

[連続化]　：a．牛肉と豚肉を少しずつ買ってきた。[succession]（矢澤1986）

b．彼は石を少しずつ削って仏像を作った。[repetition]（　〃　）

[過程化[6]]：c．岩が少しずつ割れる。　（矢澤2000改）

(9)【「少しずつ」が同時量を表す場合】

［同時量］　：a．学生達が少しずつ座っている。(矢澤 1986 改)

「少しずつ」の修飾関係の解釈が(8a)から(8c)のように達成の量から達成の程度へと連続すること、言い換えれば、ひとまとまり性を有する複数の動作の連続生起から分割された単一動作の連続的進展への幅をうまく捉えている。一方、(9a)は、名詞句の数性に還元されるべき問題の解釈として区別される。また、(4)についての指摘はないが、このような例も関連性を持った位置づけが必要である。加えて、(8b, c)の分類基準が問題点としてあげられる。次の例を見られたい。

(10) 太郎がストローでジュースを少しずつ飲む。

矢澤論文の分類基準では、(10)が［repetition］(反復動作) か、［過程化］(単一動作の漸次的進展) かは、分明ではない。これは、動作が単数か複数かによって分類を規定しようとしたためで、被修飾部の単位動作をどのように捉えるかによって、分類先が変わってしまう。よって、本稿では、矢澤の示した分類基準を完全には支持しない。また、矢澤の分類基準のもう一つの問題点は、「少しずつ」に(8a-c)のどの解釈が適応されるのかは、共起成分の問題であるとしており、動詞句に関する検討は十分になされていないことである。本稿では、動詞句の特徴が「少しずつ」構文の解釈の違いに起因していると考え、(8a-c)の「少しずつ」構文の分類基準を画定するために、「(動作の) 限界性」という概念を導入して考察を進める。

1.2 「定量進展解釈」と「参与成分配分解釈」(矢澤 1986 の「同時量」) について

矢澤 1986 で数量のあり方が「同時量」である例として示された(9a)は、名詞句の複数性に支えられていて動詞句の性質を問題としない (複数性を持つ参与成分が個々に事態に関わっていく) 解釈であるといえる。これを「少しずつ」構文の「参与成分配分解釈[7]」とする。これに対して、動作のあり方が「少しずつ」によって修飾される場合は、「定量進展解釈」として区別する。

(11)「30 本のポールが少しずつ倒れる」

a．「参与成分配分解釈」：(例) 30 本のポールが、3 本ずつ倒れていく[8]。

b．「定量進展解釈」　　：(例) 30 本のポール全体が、5 度ずつ倒れていく。

「参与成分配分解釈」が「定量進展解釈」と決定的に異なるのは、(11a)が、「同時に何カ所かで 3 本ずつ倒れる」という解釈を許容することから、「少しずつ」が表している動作が、非継起的に発生してもよいという点であろう。これに対して、(11b)の「定量進展解釈」では、継起的発生が義務的である (3 節で詳しく考察する)。本稿の考察の目的は、動

詞句と「少しずつ」構文の解釈の関係を明らかにすることなので、ここでは、これ以上の考察をしない。「参与成分配分解釈」については、その体系的位置づけのみを問題にする。

2. 動詞の「限界性」と「少しずつ」構文の解釈

2.1 「限界性」にもとづく動詞（句）分類

本節では、「少しずつ」構文の解釈に「(動作の）限界性[9]」の有無が強く影響することを述べる。具体例を考察する前に、本稿で言う「限界性」を規定する。動詞句が「限界性」を持つということは、「動作の終端点を含意する」ことである。「限界性」には、先行研究で指摘されるように語彙的なものと外的要因によるものとがある。本稿では、限界性のあり方に着目して、「内的限界動詞[10]（telic な動詞)」、「非内的限界動詞（atelic な動詞)」、「外的限界動詞句（telic な動詞句)」に三分類する。

内的限界動詞は、語彙的に限界を持つ動詞である。よく知られているように動作に過程がある場合内的限界動詞は、期限を表す成分（期間 Q デ）と共起しやすく、期間を表す成分（期間 Q）とは共起しにくい。

(12) [内的限界動詞]

a．開ける／入れる／折る／崩す／裂く／倒す／たたく[11]／止める／抜く／剥く／離す／はめる／開く／破る／割る　など（以上他動詞）

b．落ちる／変わる／消える／切れる／閉まる／染まる／散る／付く／つぶれる／治る／曲がる　など（以上自動詞）

次に、非内的限界動詞を見てみよう。この動詞は語彙的に限界を持たず、期間を表す成分（期間 Q）と共起しやすく、期限を表す成分（期間 Q デ）と共起しにくい。

(13) [非内的限界動詞]

a．動かす／歌う／（荷物を）押す／聞く／こねる／さわる／食べる／飲む／話す／（紐を）引く／（窓を）拭く　など（以上他動詞）

b．遊ぶ／歩く／泳ぐ／きらめく／転がる／下がる／すべる／泣く／回る／もがく／揺れる／笑う　など（以上自動詞）

また、非内的限界動詞が「特定的（specific）あるいは定（definite）の名詞句[12]」、「達成量[13]」、「到達点」を表す成分によって外的に「限界性」を付与される場合がある[14]。本稿ではこのような例を外的限界動詞句とする。

(14) [外的限界動詞句]

a．荷車を壁まで押す／テープを最後まで聞く／饅頭を 10 個食べる／コー

ヒーを 200ml 飲む／200m の白線を引く[15]／400P. の文法書を読む　など（以上他動詞）

b．10km 歩く／向こう岸まで泳ぐ／(気温が) 10℃ 下がる　など (以上自動詞)

2.2　進展の意味と「少しずつ」構文の解釈

2.2.1　「進展」の分析

本節では、動作の限界性と「少しずつ」構文の解釈を考察する。具体的な考察を始める前に、「少しずつ」がどのような「進展」を表しているのかを明確にしなくてはならない。

(15)　a．太郎がドアを少しずつ開ける。　(進展解釈A：(1)再掲)
　　b．太郎が牛肉を少しずつ買ってくる。　(進展解釈B：(2)再掲)
　　c．太郎が牛肉と豚肉を少しずつ買ってくる。　(進展解釈C：(3)再掲)
　　d．太郎がカステラを少しずつ厚く切る。　(進展解釈D：(4)再掲)

(15a：進展解釈 A) は動作の量を「少しずつ」で修飾しており、(15d：進展解釈 D) は動作の進展に伴う変化量を「少しずつ」で修飾している。前者を「動作の進展」、後者を「変化の進展」とする。ただし、「変化の進展」がある場合にも、表現の視点が動作の起こり方にないというだけで「動作の進展」も並行的に存在する。二つの進展を次のように規定する。

(16)「進展」の意味の規定
　　a．「動作の進展」：動作の量の進展
　　b．「変化の進展」：動作の進展に伴う変化量や程度の進展

(15b, c:進展解釈 B, C)について見ていく。共に「変化の進展」はない。しかし、(6b)のように(15b)は、達成量と共起できるが、(6c)のように(15c)は達成量と共起しにくい。このような違いをどのように考えればよいのか。本稿では、(15b)には、「動作の進展」があるが、(15c)には、「動作の進展」がないためと分析する。次の例を見られたい。

(17)　a．太郎が牛肉を少し買ってくる→牛肉を少し買ってくる→牛肉を少し買ってくる→牛肉を少し買ってくる→牛肉を少し買ってくる→・・・
　　b．太郎が牛肉を少し買ってくる、豚肉を少し買ってくる
　　c．太郎が牛肉を少し買ってくる→豚肉を少し買ってくる→牛肉を少し買ってくる→豚肉を少し買ってくる→牛肉を少し買ってくる→・・・

(15b)は、(17a)のような「くりかえし性」を持つ連続動作を表せるが、(15c)は、「動作の進展」を持たないため、(17b)のように解釈され、(17c)のような動作を表せない[16]。

また、(5c)のように、主体の複数性に関係なく「同時に」と共起できることからも、「動作の進展」がないことが確認できる。(15c)には、「動作の進展」がないのであるから動作の量を累計として捉えにくく、(6c)のように達成量と共起しにくいのである。よって、(15c)は、他の例と区別して、「参与成分配分解釈」として位置づけるべきであろう。

2.2.2 「進展解釈」の分析

以上の考察をふまえて「少しずつ」構文の進展解釈を分類する。まず、「変化の進展」の有無に注目して、「定量進展解釈」と「漸進的進展解釈」に二分する。

(18)「定量進展解釈[17)]」:「動作の進展」があり、かつ「変化の進展」がない
(19)「漸進的進展解釈」:「動作の進展」があり、かつ「変化の進展」がある

さらに、「定量進展解釈」に注目してみると、連続生起する少量の動作をひとまとまりなものとして捉える「個別進展解釈」(矢澤 1986 の「連続化」に相当する)と単一動作が達成(「動作の限界」)を目指して進展していく「内部分割解釈」(矢澤 1986 の「過程化」に相当する)に分類できる。「動作の進展」を持つ「少しずつ」構文の解釈を次のように分類する。

(20)「定量進展解釈」
　a.「内部分割解釈」:動作が定量に分割され、達成に向かって進展していく
　　(例) 太郎がドアを少しずつ開ける。((1)再掲)
　b.「個別進展解釈」:少量と認知できる量の動作が連続的に生起する
　　(例) 太郎が少しずつ歩く。
(21)「漸進的進展解釈」
　　:「動作の進展」に伴う「変化の進展」がある
　　(例) 太郎が河原の石を少しずつ遠くに投げる。

2.3 「定量進展解釈」と動詞句の限界性

2.3.1 「少しずつ」構文の解釈(内的限界動詞句の場合)

本節では、限界性による分類と「定量進展解釈」の関係を確認する。まず、内的限界動詞と「少しずつ」が共起した例から見ていく。

(22) a. 太郎が布を少しずつ裂く。
　b. 太郎がドアを少しずつ開ける。((1)再掲)
　c. ロープが少しずつ切れる。

内的限界動詞が「少しずつ」と共起した場合、それぞれ「(完全に) 裂く」「(完全に)

開ける」「(完全に) 切れる」という動作の (終了) 限界の達成に向かって、動作が「少しずつ」進展していくという「内部分割解釈」になる。

2.3.2 「少しずつ」構文の解釈 (非内的限界動詞の場合)

次に、非内的限界動詞と「少しずつ」が共起した例を見る。

(23) a. 太郎が荷物を少しずつ動かす。
b. 太郎が少しずつすべる。
c. 太郎が少しずつ歩く。

非内的限界動詞が「少しずつ」と共起した場合、少量の動作の連続生起をひとまとまりのものとして捉える「個別進展解釈」になる。また、動作が限界に達することはない。

2.3.3 「少しずつ」構文の解釈 (外的限界動詞句の場合)

外的限界動詞句と修飾成分「少しずつ」が共起した場合、外的要因 (下線の成分) によって限界性が付与され、内的限界動詞の場合と同様に、「内部分割解釈」になる。

(24) a. 太郎が 200m の白線を少しずつ引く。
b. 太郎がコーヒーを少しずつ 200ml 飲む。
c. 太郎がトンネルを少しずつ出口まで歩く。

2.4 「漸進的進展解釈」と「進展の方向」

「変化の進展」に注目した表現である「漸進的進展解釈」では、動作間における「変化の進展」がどの方向に向かっているのかを明示的に示す必要がある。この方向を示す成分を「進展の方向」(下線の成分) とする[18]。

(25) a. 太郎がカステラを少しずつ厚く切る。
b. 太郎が少しずつ早く歩く。

前節で取り上げた「定量進展解釈」と違い、「漸進的進展解釈」では、動作の「限界性」の有無は解釈や含意の違いとして表れない。

(26) a. 太郎が布を少しずつ大きく裂く。(内的限界動詞)
(一区切りで裂く布の量が一回ごとに漸次的に拡大していく)
b. 太郎が少しずつ長く歩く。(非内的限界動詞)
(習慣読みで、歩く時間が一回ごとに漸次的に拡大していく)

また、「漸進的進展解釈」の「少しずつ」構文では、「到達点」や「達成量」を表す成分が共起しにくい。

(27) ?太郎が少しずつ長く学校まで歩く[19]。
　　(cf. 太郎が少しずつ長く歩く)
(28) ?太郎が体育館の窓を少しずつ大きく10枚開ける。
　　(cf. 太郎が10枚の窓を少しずつ大きく開ける)
(29) ?太郎がトラックを少しずつ早く200m走る。
　　(cf. 太郎が200mのトラックを少しずつ早く走る)

(27-29)のような「漸進的進展解釈」は、「変化の進展」に注目しているので、「動作の進展」の累積の結果である達成量(「200m」や「10枚」)や到達点(「学校まで」)が共起すると、どちらの進展に注目しているのか視点が定まらず、許容されにくくなるのであろう。

3. 連続動作の「継起性」と主体の入れ替え

3.1 「動作の進展」と「継起性」

本節では、連続生起する動作間の関係に注目する。まず、「少しずつ」構文の継起性の含意を見ていく。既に述べたように、「動作の進展」を持つのであれば、継起性を含意し、(30a, b)のように「同時に」と共起できない。これに対して、複数の参与成分が個々に事態に関わっていく(30c)の「参与成分配分解釈」では、継起性は含意されない。ただし、本稿で言う「継起性の含意なし」は、継起性の含意が義務的ではないことを表し、継起的発生を必ずしも排除しない[20]。

(30) a. *太郎が布を　同時に　少しずつ裂く。
　　b. *太郎が壁を　同時に　少しずつ強くたたく。
　　c. 太郎が牛肉と豚肉を　同時に　少しずつ買ってくる。((5c)再掲)

ただし、主体が単数の場合でも、「動作の進展」の有無に関係なく、同時に複数の動作を行えないという語用論的な制限から、継起的発生に固定されている可能性がある。次節では、主体の複数性を考慮して、どのような「少しずつ」構文が継起性を含意するかを考察する。

3.2 「定量進展解釈」と主体入れ替えおよび継起性について

3.2.1 主体入れ替えがある「少しずつ」構文の継起性(内的限界動詞の場合)

本節では、複数主体が関わる「少しずつ」構文の場合を考えていく。入れ替えがある

解釈では単数主体のように語用論的な制限をうけることはない。まず、主体入れ替えがある場合の内的限界動詞の「少しずつ」構文について継起性の含意の有無を見ていく。

(31) a．3人の学生が布を少しずつ裂く。
b．3人の学生が　同時に　布を少しずつ裂く。
c．3人の学生が針金を少しずつ曲げる。
d．3人の学生が針金を　同時に　少しずつ曲げる。

(31a, c)には、「3人の学生が順番に入れ替わり布を裂いていく／針金を曲げていく」という解釈と「3人の学生がそれぞれ布の違う部分を少しだけ裂く／針金の違う部分を少しだけ曲げる」という解釈がある。(31b, d)のように「同時に」と共起できるのは、後者の解釈の場合で、この場合、(3)と同様にそれぞれの動作が独立し、くりかえし性を持たない「参与成分配分解釈」となる。これに対して、前者は、文脈的な支えがある場合の継起性の含意がある「内部分割解釈」である。便宜的に(31a, c)の前者の解釈を単数主体の場合と区別して「複数主体による内部分割解釈」とする。ところで、(31b, d)は、「3人がそれぞれ布を（どんどん）裂いていく／針金を（どんどん）曲げていく」という解釈も可能である。この解釈は、「内部分割解釈」で継起性を含意しなくてもよい場合の例ではなく、複数の主体が平行的に動作を行っていることを表しているにすぎない。このような解釈は本稿の意図する「複数主体による内部分割解釈」ではないので考察の対象としない。以降の分析でも同様である。結局、複数主体の場合でも、「内部分割解釈」は、継起性を含意するということになる。

3.2.2　主体の入れ替えがある「少しずつ」構文の継起性（非内的限界動詞の場合）

次に、非内的限界動詞と「少しずつ」構文を見ていく。

(32) a．3人の学生が少しずつ歩く。
b．3人の学生が　同時に　少しずつ歩く。
c．3人の学生が荷物を少しずつ動かす。
d．3人の学生が　同時に　荷物を少しずつ動かす。

前節と同様に、(32a, c)には、二つの解釈があり、継起性を含意しない解釈（例えば、「並んで歩く／荷物をそれぞれが違う方向に動す」）は、「同時に」と共起でき、「参与成分配分解釈」となる。これに対して、文脈的な支えによって継起性を含意する場合は、3人の学生が、任意に入れ替わり、くりかえし少量の動作を行うという解釈が可能な場合もある。その場合、非内的限界動詞の場合は、単数主体と同様に、動作が限界に達することはない「複数主体による個別進展解釈」となる。

3.2.3　主体の入れ替えがある「少しずつ」構文の継起性（外的限界動詞句の場合）

同様に、外的限界動詞句と「少しずつ」構文を見ていく。

(33) a．　3人の学生が少しずつ学校まで歩く。
　　b．*3人の学生が　同時に　少しずつ学校まで歩く。
　　c．　3人の学生がコーヒーを少しずつ200ml飲む。
　　d．*3人の学生がコーヒーを　同時に　少しずつ200ml飲む。
　　e．　3人の学生が200mの白線を少しずつ引く。
　　f．?3人の学生が200mの白線を　同時に　少しずつ引く。

(33a, c, e)は、解釈を一つしか持たず継起性を含意する「複数主体による内部分割解釈」になる。「同時に」と共起した(33b, d, f)は、複数主体の入れ替え解釈としては、許容されにくい[21]。(33)の「少しずつ」構文が継起性を含意した解釈になるのは、限界性を付与する成分が、連続する動作をひとまとまりに捉えることを強制し、「内部分割解釈」以外の解釈を抑制しているためである。

3.3 「漸進的進展解釈」と継起性について

次に、主体入れ替えがある「漸進的進展解釈」の継起性の含意の有無を見ていく。

(34) a．　3人の学生が少しずつ早く歩く。
　　b．*3人の学生が　同時に　少しずつ早く歩く。
　　c．　3人の学生が壁を少しずつ強くたたく。
　　d．*3人の学生が壁を　同時に　少しずつ強くたたく。

「複数主体による漸進的進展解釈[22]」は、継起性の含意が義務的であるため、(単一主体の場合と同様に[23])「同時に」とは共起できない。また、「進展の方向」を表す成分によって「変化の進展」を持つことが保証されるため、結果的に「動作の進展」を持つことが義務的になり、「参与成分配分解釈」は抑制される。

4. 動詞句の特徴と「少しずつ」構文の解釈の体系的整理

本節では、これまで取り上げた用例を整理するとともに、「少しずつ」の解釈との対応関係を確認する。分類基準として二項目（〈継起性〉と〈入れ替え〉）を立て、Ⅰ～Ⅷの各タイプに分類する。〈継起性〉は「継起性」の義務的含意の有無、〈入れ替え〉は「主体入れ替え」の有無、についての判定の結果である。

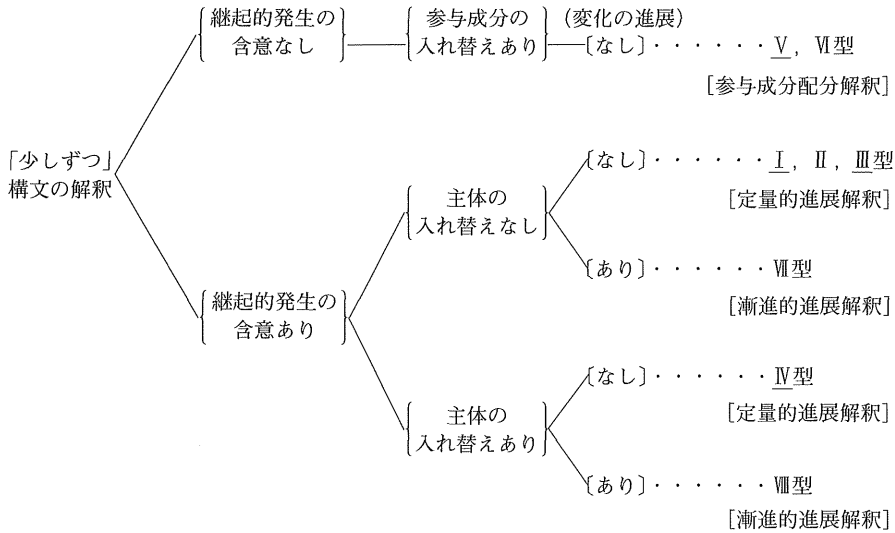
［定量進展解釈］の「少しずつ」構文	入れ替え	継起性	タイプ
(35)「内的限界動詞」			
a．太郎が布を少しずつ裂く。	×	○	〈Ⅰ型〉
b．太郎が針金を少しずつ曲げる。	×	○	〈〃〉
(36)「非内的限界動詞」			
a．太郎が少しずつ歩く。	×	○	〈Ⅱ型〉
b．太郎が荷物を少しずつ動かす。	×	○	〈〃〉
(37)「外的限界動詞句」			
a．太郎がコーヒーを少しずつ200ml飲む。	×	○	〈Ⅲ型〉
b．太郎がテープを少しずつ最後まで聞く。	×	○	〈〃〉
c．3人の学生がコーヒーを少しずつ200ml飲む。	○	○	〈Ⅳ型〉
d．3人の学生がテープを少しずつ最後まで聞く。	○	○	〈〃〉

［参与成分配分解釈］の「少しずつ」構文	入れ替え	継起性	タイプ
(38)「内的限界動詞」			
a．3人の学生が布を少しずつ裂く。	○	×	〈Ⅴ型〉
b．3人の学生が針金を少しずつ曲げる	○	×	〈〃〉
(39)「非内的限界動詞」			
a．3人の学生が荷物を少しずつ動かす。	○	×	〈Ⅵ型〉
b．3人の学生が牛肉を少しずつ買う。	○	×	〈〃〉
c．太郎が牛肉と豚肉を少しずつ買う。	○	×	〈〃〉

［漸進的進展解釈］の「少しずつ」構文	入れ替え	継起性	タイプ
(40)「内的限界動詞／非内的限界動詞」			
a．太郎が河原の石を少しずつ遠くに投げる。	×	○	〈Ⅶ型〉
b．太郎がカステラを少しずつ厚く切る。	×	○	〈〃〉
c．3人の学生が河原の石を少しずつ遠くに投げる	○	○	〈Ⅷ型〉
d．3人の学生がカステラを少しずつ厚く切る。	○	○	〈〃〉

各構文タイプと動詞句の特徴の対応関係を樹形図にまとめると次のようになる。

(41) 動詞句の特徴と「少しずつ」構文の解釈の対応関係の樹形図
（※下線の型は、「変化の進展」がなく、「限界性」を含意する。）



(41)の樹形図から、「少しずつ」構文は、継起的発生ではない場合、「参与成分配分解釈」となる。また、「継起性」を含意し、かつ「変化の進展」を持つ場合、「漸進的進展解釈」となり、「継起性」を含意し、かつ「変化の進展」を持たない場合、「定量進展解釈」となることが分かる。既に確認したように「内部分割解釈」の場合は、「限界性」の含意を要求するので、Ⅰ、Ⅲ、Ⅳ型が「内部分割解釈」となる。また、Ⅴ、Ⅵ型は、基本的には「参与成分配分解釈」で、文脈の支えがない場合は、「定量進展解釈」は得られにくい（特にⅥ型は、文脈の支えがあっても「くりかえし性」を持つ解釈が得られにくい）。これらの「少しずつ」が、それぞれの動作主または対象“ごと”の量を表していると解釈されやすいためであろう。ここまでの分析をふまえて、動詞句の特徴と各解釈との対応関係を次のようにまとめる。

(42) 動詞句の特徴と「少しずつ」構文の解釈の対応関係

<table>
<tr><td colspan="3">継起的発生</td><td colspan="2">非継起的発生</td></tr>
<tr><td>「変化の進展」あり</td><td colspan="2">「変化の進展」なし</td><td>「変化の進展」あり</td><td>「変化の進展」なし</td></tr>
<tr><td rowspan="2">漸進的進展解釈</td><td>限界性あり</td><td>限界性なし</td><td rowspan="2">なし</td><td rowspan="2">参与成分配分解釈</td></tr>
<tr><td>内部分割解釈</td><td>個別進展解釈</td></tr>
</table>

2.2.2 節で述べたように、連続した動作をひとまとまりのものと捉えている「連続化（repetition）」が「個別進展解釈」に、一つの動作の進展の過程を強制的に分割したと捉えている「過程化」が「内部分割解釈」に対応している。本稿で「（動作の）限界性」という新たな基準を導入したのは、矢澤 1986 で示された「repetition（動作の連続）」と「過程化[24]（動作の分割）」という分類基準では、単位動作の設定の仕方によって分類が変わり、基準が曖昧なものとなるからである。これに対して、「限界性」を用いた分類は、単位動作が問題とならないため、曖昧性が少なく、「少しずつ」構文の解釈を確定する手段として、より有効性が高いと考えられる[25]。次の例を見られたい。

(43) a．太郎がストローでジュースを少しずつ飲む。((10)再掲)
　　b．太郎がストローでジュースを少しずつ 200ml 飲む。

(43a)は、1.1 節で分類先が曖昧になるとした例であるが、「限界性」を用いた分類では、(43a)は「個別進展解釈」（動作の連続）に、(43b)は「内部分割解釈」（動作の分割）になる。

5. まとめ

(41)の図と(42)の表から「少しずつ」構文の解釈を確定する要件をまとめる。

(44)「少しずつ」構文の解釈と動詞句の要件
　a．「内部分割解釈」の要件：
　　①「変化の進展」がない
　　②動詞句が「限界性」を含意する
　　③動作の「継起的発生」が義務的である
　　④「達成量」と共起できる
　　⑤動作が「くりかえし性」を持つ（限界に達するまで）
　b．「個別進展解釈」の要件：
　　①「変化の進展」がない
　　②動詞句が「限界性」を含意しない
　　③動作の「継起的発生」が義務的である
　　④「達成量」と共起できない
　　（「達成量」が共起すると「内部分割解釈」になる）
　　⑤動作が「くりかえし性」を持つ
　c．「参与成分配分解釈」の要件：
　　①「変化の進展」がない
　　②動詞句の「限界性」の含意が義務的ではない

③動作の「継起的発生」が義務的ではない
④「達成量」と共起できない（「動作の進展」がない）
⑤動作が「くりかえし性」を持たない

d.「漸進的進展解釈」の要件：
①「変化の進展」があり、変化量が漸次的に増減する
②動詞句の「限界性」の含意が義務的ではない
③動作の「継起的発生」が義務的である
④「達成量」と共起しにくい
⑤動作が「くりかえし性」を持つ

「少しずつ」構文において、「変化の進展」や「継起性」の有無は、修飾関係を構成するのが「動作の進展」の側面であるのか、それとも「変化の進展」の側面であるのかを確定し、「限界性」の有無は、「少しずつ」の値のあり方を確定していると言うことができる[26]。

これまでの「少しずつ」についての研究は、「少しずつ」がどのような数量に関係するのかを記述するにとどまり、「少しずつ」がどのような進展や値のあり方を示すのかや、「少しずつ」構文の制限や要件については明示的に示されていなかった。本稿で示した「少しずつ」の進展の解釈、動詞句の特徴の整理、「限界性」という観点からの分析は雑多な解釈を抱える「少しずつ」構文の体系的な記述に有効であると考えられる。

最後に、本稿の位置づけと今後の研究の展開を述べる。本稿で述べた「少しずつ」構文についての考察は、矢澤1983で示されている進行相修飾成分[27]の諸相を横断的に記述することを目標とする研究の一環である。本稿で取り扱う現象および分析は、局所的ではあるが、このような分析の積み重ねによって、修飾関係を結ぶ階層およびそれを結ぶための要件の記述が可能となり、そこからさらに進行相修飾成分および修飾関係の一般化へと繋がることが期待される。

〈注〉

1）(4)は、「カステラを　数切ずつ　厚く切る」という、切る厚さに変化がない読みも可能であるが、その場合は、(1)の例と同じ進展解釈を表していると考える。以降の解釈が二義的になる例も同様に考える。

2）『現代副詞用法辞典』（飛田・浅田1984）では、「少しずつ」には「①量、②時間、③距離、④程度」などと関わる解釈があるという。しかし、このような指摘は、「少しずつ」は量や程度を持つ要素と関わりを持ち得るということであり、それらの要素をすべて列挙することは困難である。よって、本稿では、「少しずつ」が何との関わりを表しているのかを捨象して考える。

3）仁田2002にも副詞的成分「少しずつ」について次のような記述がある。

〈進展様態型〉は、時間の展開に従って、事態が進展していき、その進展とともに、事態の内実である変化（また、その程度性）が漸次的に拡大していくことを表しているものである。（仁田2002：241 括弧は引用者注）

仁田2002では、品詞レベルで「少しずつ」構文の表す意味を網羅的に扱おうとしたため、大まかな記述となり、(1)-(4)のような多様な進展の違いをうまく説明できていない。

4）(6c)に関して本稿で想定しているのは、「牛肉と豚肉を一回ずつ買ってきて、その総計が 1kg である」という解釈である。「牛肉と豚肉を数回買いに行き、買ってきた総計がそれぞれ 1kg である」という解釈は、(6b)の進展解釈と考える。

5）矢澤 1986 における、「少しずつ」についての記述は個別的なものではなく、「～ずつ」についての包括的な分析の中で述べられている。

6）矢澤 1986 の「過程化」は、矢澤 2000 において「内部分割化」に整理される。

7）「参与成分配分解釈」は、矢澤 1986 における「同時量」の解釈に相当する。(矢澤 1986：85f.）また、荒井 1992 においても同様な分析が示されている。(荒井 1992：63 および 74ff.)

8）(11a)の（例）に示した解釈以外にも幾つかの解釈が考えられるが、本稿で問題としているのは、参与成分が、個々に事態に関わっていく解釈であるのか（「参与成分配分解釈」)、参与成分自体は、固定されておりその程度や量が進展していく解釈であるのか（「定量進展解釈」）という違いである。

9）「(動作の）限界性」については、奥田 1988、工藤 1995 をはじめ多くの先行研究に言及がある。例えば、須田 2000 では、次のように規定する。

　　そこにいたれば、動作の展開の過程がつきはて、それ以上展開することのできないような、動作の臨界点である。(須田 2000：87)

10）動詞句分類の基準（「内的限界動詞」と「非内的限界動詞」）は、工藤 1995 の分類を参考にした。ただし、工藤 1995 は、動作の限界が必ず変化を伴うとする立場であるが、これに対して変化を伴わない動作の限界を認める立場があり、本稿は後者による。よって、動詞リストに一部出入りがある。変化を伴わない動作の限界に関する議論については、奥田 1994b、川野 2001 などを参照されたい。

11）「たたく」「さわる」「こする」「さする」などのいわゆる接触・打撃系の動詞（非変化動詞）は、単独では、「少しずつ」と共起しにくい。これらの動詞には、「少しずつ」の進展性と呼応できる内的な過程性がないためであると考えられる。

12）名詞句の「有界性（boundedness)」についての議論も当然考慮した上で論を進めなくてはならないが、本稿の考察では、これまでの範囲での「限界性」という道具立てで十分であると判断したため割愛した。日本語の分析に「有界性」という概念を導入する有効性についての議論は、井本 2001、影山・上野 2001 などを参照されたい。

13）本稿では、連用修飾成分として生起する場合の数量を動作の「達成量」とする。連用修飾成分としての数量詞（達成量）に関する議論は、矢澤 1985、三原 1998、堀川 2000 などを参照されたい。

14）外的要因による限界性の付与（アスペクト限定）に関する議論は、Tenny1994、北原 1999、三原 2002 などを参照されたい。

15）いくつかの先行研究によって日本語では数量詞が連体修飾成分として表れる場合、必ずしも表される数量が動作の達成量と等価ではないことが指摘されている。ただし、本稿の分析においては、動詞句が限界性を含意するか否かが問題であり、動作が達成されたかどうかは問題とはならない。詳しくは、矢澤 1985、北原 1996、北原 1999、影山・上野 2001 などを参照されたい。

16）必ずしも「牛肉を買ってくる」と「豚肉を買ってくる」が交互になされなくても良いが、いずれにせよ、それぞれが個別に繰り返し発生する読みはしにくい。

17）「定量進展解釈」は、動作の量が少量と認知できる程度であることを表している。連続生起する動作間に「変化の進展」がないという点において定量的であり、厳密な意味での一定量を表しているわけではない。

18）北原 1975、北原 1981 で指摘される「状態概念を含意する被修飾成分」は、「進展の方向」を語彙レベルで含意したものと見ることもできるであろう。

19）例えば、(27)について「太郎が学校まで少しずつ長く歩く」の語順にすると許容度が上がるという話者がいるかもしれない。この語順では、連体修飾の位置と同様の解釈が強い。矢澤 1985 などによっ

て、数量詞の連用修飾成分は、より動詞の近くに生起したほうが「達成量」として解釈されやすいことが報告されている。本稿では、「学校まで」などの着点を表す成分も同様であると考え、アスペクト限定詞としての解釈を確定するために、このような語順とした。(28)、(29)についても同様である。

20) 例えば、「牛肉と豚肉を少しずつ買う」のような例においては、「牛肉と豚肉を　順番に　少しずつ買う」のような順次的発生解釈は排除されない。

21) (33f)と他の例との間に許容度の差が感じられるのは、連体修飾成分としての数量詞“200ml”のアスペクト限定の機能が、連用修飾成分のそれに比べて弱いことに関連していると思われる。

22)「複数主体による漸進的進展解釈」とは、主体がかわるがわる「変化の進展」に関わっていくという解釈である。次の例を見られたい。

・3人の学生が河原の石を少しずつ遠くに投げる。

(学生Aが石を投げる→BがAより遠くに石を投げる→CがBより遠くに石を投げる)

23)「単一主体による漸進的進展解釈」においても、次のような非継起的発生解釈は、許容されない。

・*太郎が壁を 同時に 少しずつ強くたたく。

24) 矢澤2000において「内部分割化」(矢澤1986の「過程化」に相当)を次のように規定する。

仮に、主体や対象が非分割的で、動作も一回的かつ一体的であっても、その主体や対象を部分の集合と捉えて、動きを細分化し、強制的に過程性を読み込むことである。(矢澤2000：224)

25) 本稿の分析では、矢澤1986の分類の[succession]の中にも「内部分割解釈」を認めている。詳しくは、3.2.1節の「複数主体による内部分割解釈」に関する分析を参照されたい。

26) 次のような例を許容する話者であれば、「漸進的進展解釈」における「変化の進展」も定量的に達成に向かう「内部分割解釈」として、規定され得る可能性がある。

・太郎が河原の石を20mまで少しずつ遠くに投げる。

27) 進行相修飾成分とは、「次々に」「くりかえし」「徐々に」「次第に」「少しずつ」「だんだん」「どんどん」など、様態相修飾成分の階層で修飾関係を構成するの副詞的修飾成分である。詳しくは矢澤1983、矢澤2000などを参照されたい。

〈参考文献〉

荒井文雄　1992　「日本語動詞の意味構造と語彙的アスペクト」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』13

井本　亮　2001　「日本語動詞分析における「有界性」の有効性ー意味的要件としての複数性をめぐってー」『筑波日本語研究』6　(筑波大学　日本語学研究室)

奥田靖雄　1988　「時間の表現 (2)」『教育国語』1-95

――――　1994a「教師のための文法 動詞の終止形 (その2)」『教育国語』2-12

――――　1994b「教師のための文法 動詞の終止形 (その3)」『教育国語』2-13

影山太郎・上野誠司　2001　「移動と経路の表現」影山太郎 (編)『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店

川野靖子　2001　「ヲ格を伴う移動動詞句についてーアスペクト的観点からの動詞句分類における位置づけー」『日本語と日本文学』33　(筑波大学国語国文学会)

北原博雄　1996　「連用用法における個体数量詞と内容数量詞」『国語学』186

――――　1999　「日本語における動詞句の限界性の決定要因ー対格名詞句が存在する動詞句のアスペクト論ー」黒田成幸・中村　捷 (編)『ことばの核と周縁』くろしお出版

北原保雄　1975　「修飾成分の種類」『国語学』103

――――　1981　『日本語の文法』(日本語の世界6) 中央公論社

金水　敏　2000　「時の表現」 金水　敏・工藤真由美・沼田善子 (著)『日本語の文法2　時・否定と取り立て』岩波書店

工藤真由美　1995 『アスペクト・テンス体系とテクスト－現代日本語の時間の表現－』ひつじ書房
新川　忠　1979 「『副詞と動詞のくみあわせ』試論」言語学研究会（編）『言語の研究』むぎ書房
須田義治　2000 「限界性について―限界動詞と無限界動詞―」『山梨大学教育人間科学部紀要』1-2
高橋太郎　1985 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』（国立国語研究所報告 82）秀英出版
――――　1989 「動詞（その 7）」『教育国語』1-96
――――　1989 「動詞（その 8）」『教育国語』1-99
仁田義雄　2002 『副詞的表現の諸相』くろしお出版
飛田良文・浅田秀子　1984 『現代副詞用法辞典』東京堂出版
堀川智也　2000 「数量詞連結構文の本質」『国語と国文学』915
三原健一　1998 「数量詞連結構文と『結果』の含意」（上、中、下）『言語』27-6、27-7、27-8
――――　2002 「動詞類型とアスペクト限定」『日本語文法』2-1
森山卓郎　1985 「程度副詞と動詞句」『京都教育大学国文学会誌』20
――――　1988 『日本語動詞述語文の研究』明治書院
矢澤真人　1983 「状態修飾成分の整理」『日本語と日本文学』3 （筑波大学国語国文学会）
――――　1985 「連用修飾成分の位置に出現する数量詞について」『学習院女子短期大学紀要』23
――――　1986 「反復の連用修飾成分－「動詞句の素性と反復表現の構文論的考察」試論－」『国語国文論集』15 （学習院女子短期大学）
――――　2000 「副詞的修飾の諸相」仁田義雄・村木新次郎・柴谷方良・矢澤真人（著）『日本語の文法 1 文の骨格』岩波書店
吉川武時　1971 「現代日本語動詞のアスペクト研究」金田一春彦（編）1976『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房（再録）
Tenny, Carol 1994 *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface.* Kluwer.

（みやぎ　しん　筑波大学大学院博士課程　人文社会科学研究科　日本語学）